

図書館たより

号数 第60号
 発行日 昭和58年4月1日
 編集発行 島根県立図書館
 松江市内中原町52
 TEL (0852) 22-5725
 印刷 渡部印刷株式会社



西部読書普及センター(仮称)の開設

島根県立図書館長

林 晃二

昭和60年度オープンを目指して、浜田市に県立図書館の西部読書普及センター（仮称）が設置されることになった。極めて厳しかった58年度当初予算の中で、わが県立図書館としては唯一の明るいニュースである。このセンターは、概ね江川以西をサービス・エリアとして、県立図書館の読書普及活動の拠点となるもので、この設置については56年以来力を尽してきた。

県立図書館は、県民誰にでも、また、どこに住んでいる人に対しても、均しくサービスしなければならない。だが、松江市に所在する県立図書館が全県民に均しくサービスすることは、現実にはなかなかむつかしいことである。そこで、市町村と提携して、その読書施設（図書館、公民館図書室等）を通じてサービスすることになる。そのためには、県下の全市町村に図書館を主体とする読書施設が整備されて、これらに対して、県立図書館が資料の貸与、情報の提供、技術的な指導や助言を行なって活動を援助して、間接的な形で全県民にサービスを提供することとなる。これが、所謂、県立図書館を中心とする全県的な「図書館サービス網」である。県立図書館は、このサービス網の整備のため関係市町村の教育委員会と手を組んで移動図書館車の巡回、図書センター制度の導

入、読書普及モデル市町村事業等の活動を続け、市町村の読書施設の整備、充実に力を注いでいる。

ところが、わが県は東西に長い上に離島を抱える地形的な制約のため、石見地域や隠岐地域へのサービスが手薄になりがちである。これを何とか打開しようと、56年に県立図書館協議会に対し「島根県における図書館のサービス網の拡充方策」について諮詢したところ、県西部における読書普及の活動拠点の設置について提言を受けた。この提言に基づいて具体的な計画をすすめていたところ、たまたま検討中であった石見教育センター（仮称）設置構想とドッキングさせて、同一建物内に読書普及センターを設けることとなったものである。58年度で土地造成費と建物設計費が計上され、59年度で建築、60年度に開所の予定である。

このセンターの主な業務は、市町村読書施設に対して、図書資料を援助すること、運営の技術指導を行なうこと、読書普及活動の指導、助言を行なうこと、移動図書館車が石見地域を巡回する際巡回用図書の補給を行なうこと等である。そして、これに必要な図書資料約七千冊を備え、読書普及指導員を配置する。こうして、市町村における読書施設の整備を図り、自主的な読書普及活動を促進しようとするものである。

このセンターの設置により、石見地域における読書施設の整備に拍車がかかり、読書活動が一層活発となることを期待している。

30万冊収納書庫と新館読書室オープン

既設書庫は昭和43年10月、向こう10年間を見越して建築されましたが、すでに14年を経過し、近年では13万冊近い資料がぎっしり収蔵され、まったく余裕のない状態となっていました。

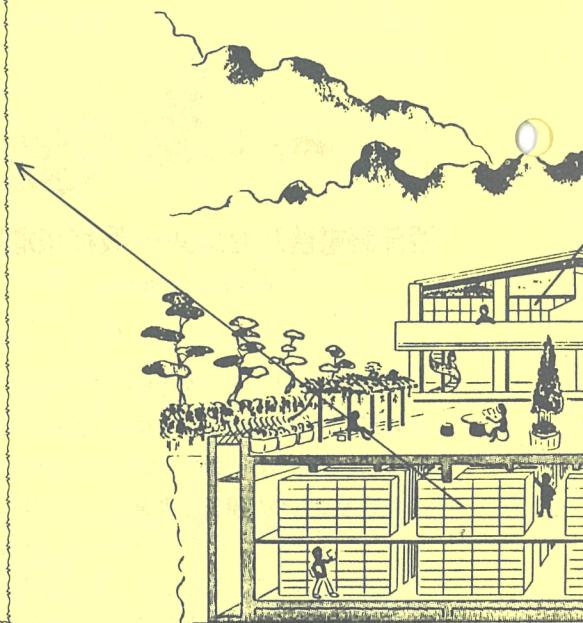
そこで昭和56・57の両年度継続事業で書庫増築工事に着手し、去る4月5日オープンいたしましたので、この施設、設備等について紹介いたします。

増築した書庫は地下書庫形式で、既設書庫の北側に隣接した場所に積層書架2層、広さは延 1,357m²で、今後15年間増加が見込まれる30万冊の資料を十分収納することが出来ます。

この書庫に設備される書棚（1段90cm、本が30冊以上収容できるもの）は約1万段で、これを平面上に並べますと約9キロメートルとなり距離にすると県立図書館から玉造温泉付近までとなります。

また書庫には空気調整の設備があり、本の保存にもっとも良い温度15℃、湿度50～55%が常に保てるようにしてあり、火災の際には水による消火でなく本の保存に影響のないハロンガスによる自動消火装置も設備され、貴重な資料が完全に保存されるようにしてあります。

その外、所蔵資料を出納するための油圧式エレベーターも完備し、更に将来所蔵冊数が増加し、出し入れが頻繁になればダム・ウェイター（電動式運搬装置）を設備し、スムーズに書庫出納ができるよう設計されています。



(テープカット)



このたびの地下書庫増築に伴い、既設の1・2階に連結する建物が同時に増設され、この2階部分が読書室として県民の皆さんにご利用いただけるようになりました。

この読書室は、今までのブラウジングルームと接続し広さは 203m²あり、室内には木製書架（4段2連W）16本に約 8,000冊が開架され、現代小説を中心とした旅行、レクリエーションや音楽、演芸、スポーツ、園芸等趣味に関するもの、また、からだや健康に関するもの手芸、和洋裁、料理等があります。



(新館読書室)

この読書室の東の窓からは、城山の緑がながめられ、小鳥のさえずる声を聞きながら静かに読書が楽しめます。また西側にはバルコニーがあり、ここからは眼下に庭園をながめることができ更に階段を下りますとその庭園が散策できベンチで緑陰読書も楽しめます。

どうぞご利用ください。



(庭園)

(地下書庫)

モデル市町村 一第3期一

昭和54年に県教育委員会が立てた「読書普及振興計画」に基づいて、読書普及を重点的に進めるモデル市町村を指定（1期3ヶ年）し、特に親子読書を中心にその活動を推進してきている。

その間、第1期木次町・仁摩町・横田町・浜田市斐川町・瑞穂町、第2期伯太町・弥栄村・島根町・石見町・多伎町・日原町が指定され、第1期の市町村はすでに3ヶ年を終了し、自立活動として確かな活動がすすめられている。第2期の市町村は3年目に入り、2ヶ年の成果をふまえ、59年度からの自立活動をめざして定着した実践がなされている。

第3期58年度指定モデル市町村は、この事業の最終指定となるため、全県的な配置を考え次表のように指定することになった。どの町村もすでに自主的な親子読書がすすめられ

| 町村名 | 対象現場 | 園児数 |
|------|------|-----|
| 玉湯町 | 2幼稚園 | 173 |
| | 2保育園 | 83 |
| 頓原町 | 2保育所 | 92 |
| 旭町 | 5保育所 | 130 |
| 美都町 | 3保育所 | 140 |
| 西ノ島町 | 3保育所 | 230 |
| 海士町 | 3保育所 | 135 |
| 知夫村 | 1保育所 | 40 |

ているが、これを機に町村ぐるみの活動として定着させたいという熱心な教育委員会の熱意と、本格的に絵本研究をし、幼児の心理と絵本のかかわり、幼児の遊びと絵本のかかわり等を深く勉強したい

という現場の先生や保母さん方の意欲で、たのもしい活動が期待されるところである。

今や県下59市町村のほとんどの地域で、何らかのかたちで親子読書が実践されるようになってきていることは、現代社会の大きな問題である校内暴力や青少年の非行等の病原である「心の荒廃」から子どもを救う唯一の方法と考えられてきたからであろう。忙しい毎日の中で僅かな時間を生み出し、あたたかいふれあいの中で絵本を読んでやることが、その子の心の健全な成長に大きな影響をもたらすものである。第3期モデル町村の成果は、県下全市町村の成果であることを期するところである。

図書センター事業

市町村読書施設の拡充促進と公立図書館設置の気運を醸成するとともに、地域住民に対する、一層の読書普及を図ることを目的とするこの事業において58年度の新規図書センターは邑智郡羽須美村で、事業開始以来19番目の設置である。

羽須美村は、県移動図書館巡回町村からの移行であり、村としては、弥栄村に続き2番目の設置である。他に県内には8村があり、このためにも特に、羽須美村の積極的姿勢に期待するところである。

更新センターは、東出雲町、多伎町、三刀屋町、温泉津町、桜江町、美都町、弥栄村、西郷町の8町村であり、これらに対し当館も積極的な援助、指導をおこなう。

- 総援助図書冊数——20,000冊
- センター巡回指導——施設整備、運営方法、普及活動についての指導を現地において実施。

58年度 図書センター申込状況

| 町村名 | 設置施設名 | 図書購入費 千円 | 人口1人当 図書購入費 円 | 57年度末 蔵書冊数 |
|------|------------|-------------|---------------------|---------------|
| 三刀屋町 | 永井記念館 | 750 | 80 | 4,075 |
| 西郷町 | 西郷町公民館 | 800 | 54 | 5,195 |
| 東出雲町 | 中央公民館 | 730 | 67 | 8,858 |
| 多伎町 | 多伎町公民館 | 600 | 133 | 3,129 |
| 弥栄村 | 老人福祉センター | 450 | 207 | 11,381 |
| 桜江町 | コミュニティセンター | 600 | 133 | 3,167 |
| 美都町 | 都茂公民館 | 500 | 141 | 5,596 |
| 温泉津町 | コミュニティセンター | 500 | 88 | 2,956 |
| 羽須美村 | 阿須那公民館 | 300 | 102 | 1,350 |
| 平 均 | | 581 | 112 | 5,079 |

この事業からの、公立図書館への移行は既に、5館（日原、仁摩、石見、佐田、瑞穂）そして、本年6月より旭町立図書館の設立が予定され成果をあげている。これらの町では、地区配本所移動図書館巡回、親子読書活動等が実施され、いつでも、誰でも、どこでも、図書の貸出が受けられる体制づくりが、着々と進みつつある。

ふるってご参加ください!!

昭和58年度 県立図書館各種講座

申込方法 「住所・氏名・電話番号・受講講座名」をハガキ
か電話で

〒690 松江市内中原町52 県立図書館管理課普及係まで
TEL 0852-22-5730

| 事業名 | 出雲国風土記 を読む会 | 古文書を読む会 | | 万葉集 を読む会 | 親子で絵本 を読む会 | 図書館 読書教室 |
|------|---|--|---|--|---|---|
| | | 入門講座 | 上級講座 | | | |
| 開催日 | 毎月 第2金曜 | 毎月 第1土曜 | 毎月 第3土曜 | 毎月 第2木曜 | 毎週 水曜 | 毎月 第2火曜 |
| 時 間 | 13:00~ 15:00 | 13:30~ 15:30 | 13:30~ 15:30 | 14:00~ 16:00 | 15:00~ 16:00 | 13:00~ 15:00 |
| 会 場 | 島根県立 図書館 | 島根県立 図書館 | 島根県立 図書館 | 島根県立 図書館 | 島根県立 図書館 | 島根県立 図書館 |
| 募集人員 | 40名 | 30名 | 30名 | 30名 | 30名 | 30名 |
| 対象 | 一般 | | | | | |
| 内 容 | わが国でただ 一つの完本と してのこって いる「出雲国 風土記」を講 読しながら古 代出雲の実相 をは握し、郷 土のもつ深い 歴史性を理解 する講座です。 | 県立図書館が 編集した「古 文書ハンドブ ック」その他 のテキストを 使用します。 初歩から手ほ どきし、読解 力の養成につ とめる講座で す。 | 入門講座を終 えた程度の読 解力をもつ人 が対象になり ます。 テキストを使 用して読解は もとより、史 料の背景をな す郷土の歴史 に及ぶ講座で す。 | 現存最古の歌 集「万葉集」 の講読と鑑賞 を行います。 原文の解説に てりくみつつ 古代文化の精 髓にふれる高 度な講座です。 今年度は「萬 葉集」巻第二 からです。 | 親と子を対象 に絵本の読み 聞かせ、スト ーリーテリング、 本の紹介等を行 い、親と子の共 通の楽しみを見 出すと共に読 書を楽しめます。 | 読書に親しみ ながら人生に 社会にありい は文化に対する 見方、考え方を 養う目的から誰 でも気軽に参加 できる講座です。 参加者はグループ を作り、集団読書 たちで和やかに意 見の交換、体験の 交流をはかります。 |

今年度受賞作品から

今年度も数々の話題をよんだ受賞作品がありました。
今回は、その中から下記の作品を紹介します。

(講談社ノンフィクション賞)

ルイズ 一父に貢いし名は 松下竜一著

講談社 1,200円

この作品は、大正12年9月、関東大震災の際、甘粕正彦憲兵大尉によって虐殺された大杉栄、伊藤野枝の遺児達の半生を、4女ルイズを中心に描いたものである。

4人の遺児の名は、魔子、エマ、ルイズ、ネストルという。(2女は養女でている。)

両親の死後、九州今宿の母方の祖父母のもとにひきとられ、そこで、魔子は真子、エマは笑子、ルイズは留意子、ネストルは栄と名前を変えられ、野枝の私生児として入籍された。(ネストルは1年ばかりで亡くなっている。)

都会的な言葉や、ハイカラな洋服を着た、特異な境遇の遺児達を見る人々の眼は冷たく、父の昔の仲間からの送金は、赤の国ロシアからくるものだと、特高が見廻りに来た。

成人した後、彼女達はそれぞれ、新聞社、医院等に勤め、平凡で静かな生活を望んで結婚した。しかし、平和な人生を送るかにみえた彼女達は、3人とも結婚を解消したのであった。「父大杉栄」「母伊藤野枝」の名は、重く娘達にのしかかり、彼女達の生活をいやおうなく追い込めていった。

留意子の夫は、父母の事では、身内の反対をおしても結婚してくれるような人であったが、ギャンブル狂のため、借金に追われる生活だった。どんなに尽しても、立ち直らない夫を見離す形で、4人の子供をつれて別れる。離婚後、読者として、初めて父の書物に触れ、その偉大さに心打たれる。

博多人形の絵付師として自立した彼女は、父母からも、世間からも、自らを解き放つために、父から貢った「ルイズ」にちなんで「ルイ」の名を使おうと思う。

歴史に翻弄され、なお自分らしく生きようとする人間の感動的な伝記である。

(日本文学大賞)

本覚坊遺文

井上 靖 著

講談社 1,500円

天正19年、千利休は秀吉の怒りに触れ、自刃した。後世、この事件に関して、多数の歴史家、作家が書いているが、はっきりと事実をつきとめているものはない。

この作品は、利休の死の動機解明に、創作ではなく、「本覚坊」という、20年来利休に仕えた側近の茶人の手記を、現代風に書き直すという形で利休の死の動機に迫ろうとしたものである。利休の死後、本覚坊は30年にわたり、師のゆかりの武人、茶人に次々会い、少しづつ、事件の核心に近づいていく。

茶室という反権力の城、富とも力とも無縁のこの世のユートピアを、利休は権力の庇護の下に作ろうとした。しかし、権力に頼ったために、より大きな不自由を強いられた。この矛盾から脱するには、死をもって、佗茶の世界に還るしかなかったのである。

乱世における佗茶の道は遊びでも、教養でもなく、刀無しの真剣勝負であり、そこに利休自刃の真因があったとして、死による蘇生をテーマに描いている。

(江戸川乱歩賞)

焦茶色のパステル

岡嶋二人 著

講談社 980円

競馬界を舞台にしたミステリー。

東北の牧場で、競馬評論家と牧場長が射殺され、彼らが見ていた2頭のサラブレッドも殺される。サラブレッドの血統に絡む真相を、評論家の妻と、親友の女性探偵が、追求していく。

著者は種々の職業を体験した人で、競馬界にも詳しく、競馬に無知な人にも十分理解できるおもしろさである。

又、もう一つの魅力は、謎解きにかかる2人の女性の会話がしゃれていることで、人妻とハイミスのコンビの軽妙なやりとりが楽しめる。

ちなみに、この「岡島二人」氏は「徳山諄一」氏「井上泉」氏の共作ペンネームであり、外国には「エラリー・クィーン」「マンフレッド・リー」等の例があるが、日本では珍しい。その点でも話題性に富んでいる。

わが家の親子読書実践記録から

親子読書に取り組んで

邑智郡邑智町立乙原保育所

中 村 定

町の教育委員会から「子どもの心を育てる読書」の講演会について通知を受けた。その中にお母さん方の出席をとあり、ひとりでも多くの受講者があればと、町内保育所全体に呼びかけた。

幸にして町の方からマイクロバスを出していただき21名が参加できた。

講師の佐藤宗夫先生自身が誠に読書家であり、実践を伴なったひとつひとつのお話を感動し、共鳴してこれからの読書指導にプラスするものが「大」であった。

受講したお母様方から「本当に良かった」という喜びの感想を聞き、また親子読書に一層の熱が入ったことも大きな実りであった。

幼児期に絵本の読み聞かせの大切さは十分認識して、毎日それぞれの年令の発達段階に似合った絵本の読み聞かせを実践して、家庭へも呼びかけたことを振り返ってみると18年間が経過している。こうした最初の「きっかけ」となったのは、島根県保育事業研究集会で「童話」に関する研究発表があり、その部会討議に参加したことから、絵本の読み聞かせの大切さを切実に感じとり実行した。

いろいろな本との出会いにより、ひとりひとりの子どもが様々な世界に入って行けるなんて、どんなに幸せなことであろうか。

限りない楽しい夢の世界へ、善と悪、優しい思いやりの心を育て、想像力が高まり、子どもの心が豊かになって行くのが感じられるのである。

また、先人から語りつがれた「民話」は私達に優しく語りかけてくれ、素朴な言葉はやわらかな響きとなって、心の中に美しい余韻となり、子どもの心の奥深く染み込んで行くものと思われる。

「いたちのこもりうた」文・絵共に美しく格調高いもので、いたちの優しい子守歌がいつまでも聞こえて来るような気がする。

わが町過疎地にも、縫製工場の設置から母親の就労が、数年来急速に増えたことから、幼児期に最も大切な肌と肌のふれあい、心と心のふれあいが減少して来ることが感じられるのである。

昔に比べると物の豊かさと電気製品などの便利さから、生活の中で時間的余裕がなくてはならないのに、かえって「忙しい、忙しい。」と日々が過され、

優しい子守歌も、子ども達の好きな「おとぎ話」も語りつがれることが少なくなったように思われる。

こうしたことから、「母と子の「心と心のふれあい」のひとつの手立てになればと思い、親子読書を保育所内に設置して7年が経過している。

最初の「本」の購入はライオンズクラブの御厚意により、また町の教育委員会、保護者会の御寄贈、県立図書館からの借り入れから親子読書の内容も充実して来たことと、家庭での読み聞かせも定着して来たところである。

しかし、熱心に毎日おかあさんやおとうさん、おばあさんが読み聞かせをする家庭もあるが、まだそうでない家庭もある。

子ども達の選んだ「絵本」が手提かばんの中に弾んで収まり保育所から家庭への「かけ橋」となる。朝、子どもが本を返す時、「せんせい、この本おもしろかったよ。」と瞳が生々と輝いている。「そう、よかったねえ。」と自分のことのように嬉しくなる。

親子読書を推奨しても、個人の考え方やそれぞれの家庭生活があり強いるものではないが、絶えずいろいろな方法や機会を通じて勧め、理解を得るようになっている。先日の生活発表会には家族連れの方がたくさん来られ、読み聞かせの大変なことについても話した。

幼児期の段階では自分で求めることは出来ないので他から良いものを与える時期である。

心の教育は今すぐに形として現われるものではないが、目に見えないからこそ大切にして行かなければならない。

毎日の本の読み聞かせを、それぞれの子どもが受けとめ、計り知れない豊かな心の「糧」となり、将来何かの形できっと現われることを信じている。

とっても本好きになって集中して聞ける2才児、繰り返し同じ本に何回でも興味を持ち、好きな本が出来た3才児、長い物語が聞けるようになり、自分でもお話をつくれるようになった5才児、このような子ども達の発達した姿に大きな喜びと意義を感じて、今日も明日も、あさっても「本」の読み聞かせを続けようとしている私達である。

あとがき

昨秋、「読書週間」にちなんで、「わが家の親子読書実践記録」を募集しましたところ、多数のご応募をいただき厚くお礼を申し上げます。

優劣をつけがたいほど立派な作品が多く、そのうち一編を掲載させていただきました。他の入選作品は「読進協」機関紙に掲載させていただきました。

寄 贈 図 書

ご惠贈ありがとうございました。

●ご尊父様香典返し

松江市石橋町 奥原堯様から「柳宗悦全集」全22巻

●ご母堂様香典返し

簸川郡斐川町 藤岡大拙様から「日本古典文学全集」全51巻

| 書 名 | 住 所 | 氏 名 |
|------------------------|-------|-----------|
| 第三句集 | 松 江 市 | 城発行所 |
| 若い芽20・21 | 松 江 市 | 生馬地区連合青年団 |
| 心の志おり | 美保関町 | 石倉久夫 |
| 校長樹林第14号 | 松 江 市 | 島根県小学校長会 |
| こだま第7号 | 安 来 市 | 宇賀荘小学校 |
| 第24回読書感想文 コンクール感想文集 | } 出雲市 | 出雲市立図書館 |
| 大社の史話 | 大 社 町 | 大社町立図書館 |
| 邑智郡大元神楽 | 桜 江 町 | 桜江町教育委員会 |
| くにびき国体総合優勝記念誌 | } 松江市 | 島根県体育協会 |
| 山陰詩人4 | 松 江 市 | 田村のり子 |
| 島根県の鳥類 | 松 江 市 | 内田 映 |

| | | |
|-------------|-------|--------------|
| 山陰文学No. 32 | 松 江 市 | 山陰文学ペンクラブ |
| 石見鴻第8号 | 江 津 市 | 原 龍雄 |
| 文集やつか | 島 根 町 | 八束郡教育研究会 |
| 読書感想文第34回 | 出 雲 市 | 小学校国語研究部 |
| 季刊図書44号 | 出 雲 市 | 県立出雲高等学校 |
| 研究紀要創刊号 | 浜 田 市 | 島根県立浜田水産高等学校 |
| 新月163号 | 広 瀬 町 | 新月社 |
| ともしび | 松 江 市 | 松江中学校国語研究会 |
| 安来市埋蔵文化財の手引 | 安 来 市 | 安来市教育委員会 |
| 古 江 | 松 江 市 | 古江公民館 |
| 芋代官頌聴碑調査資料 | 大 田 市 | 黒河邦之 |
| 年刊歌集昭和57年版 | 松 江 市 | 島根県短歌連盟 |
| 島根の木炭産業史 | 松 江 市 | 島根県木炭協会 |
| 野球部史 | 益 田 市 | 島根県立益田高等学校 |
| 大社の文芸 | 大 社 町 | 小村尚司 |
| 新校舎竣工記念 | 平 田 市 | 県立平田高校 |
| 富田城安寺中興記註解 | 能 義 郡 | 妹尾豊三郎 |
| 長久の昔ばなし | 大 田 市 | 長久公民館 |
| 校誌～島根学園～ | 松 江 市 | (学)島根学園 |
| 山陰民俗第38・39号 | 出 雲 市 | 山陰民俗学会 |
| 山中徳次画集 | 松 江 市 | 山中徳次 |
| やすぎの民話 | 安 来 市 | 安来市教育委員会 |
| 文集 昔こっぴり | 羽須美村 | 邑智郡羽須美村 |
| 島根の子ども文学風土記 | 松 江 市 | 島根県小中学校国語研究会 |
| みせん第14・15号 | 島 根 町 | 加賀公民館 |

NEWS

●親子読書活動関係者研究協議会開催

県読書推進運動協議会では昭和58年2月4日に玉湯町中央公民館、9日に浜田勤労青少年ホームで親子読書活動関係者研究協議会を開催。両会場とも、幼児期からの子育ての柱に「親子読書」をと再認識し、今後の推進方法や問題点が熱心に協議された。モデル市町村事業3年目を終える町村では、各地域での自立した活動を深めるため様々な方策がとられ他町村を啓蒙していた。



(昭和58年2月4日 玉湯町にて)

●図書センター連絡会議、移動図書館連絡会議を開催

昭和58年3月1日、図書センター、移動図書館の該当教育委員会の担当者が集まり、読書普及活動の報告、58年度図書購入予算、魅力ある図書室づくり等を中心に討議がなされた。那賀郡旭町は、58年度に町立図書館として誕生。邑智郡羽須美村が新に図書センターとしてスタートする。

●昭和57年度 図書館等読書施設職員研修会開催

3月4・5日の両日、温泉津町コミュニティセンターにおいて、島根県公共図書館協議会主催の職員研修会が開催された。この研修会は、図書館や公民館図書室などの円滑な運営と住民サービスの向上、読書普及活動の推進のために、これらに勤務する職員が毎年集って開かれているものである。

今年の参加者は約50名、「魅力ある図書館づくり」をテーマに各館からの事例・研究発表とそれについての熱心な研究討議がなされた。また夜には交流会も開かれた。